

「さあ、しつかりしてはしてるかも知れませんが、何から何までがすつかり亞鉛で張つてあるのですね。」

「そいつは困るね。」

「しきり、から何から亞鉛でせう。だから、うつかり後へ、壁にでも寄りかゝるつもりで、もたれるとガタンと吃驚するやうな音がするんです。ところが、面白いんですよ。此方でそのガタンといふ音をさして、吃驚して、隣の人の手前恐縮してゐると、五分と経たないうちに隣の人があつ、うつかりしてもたれるんですね、ガタンといふ音がして、「あッー」といふ聲がして、急に恐縮したやうに静かになるんです。氣を付けてゐると、始終彼方でも此方でも、近くの方でも、遠くの方でも、そのガタン、ガタン、「あッー」とか、中には「御免なさい、」とかいふ聲が聞えるんです、夜のことですからね。」

「はゝゝゝ。」

「はゝゝゝ。」

そして、それ等の話の間に、蓄音機の唄とトン／＼といふ徳利掲ぎの音と。

(十、二〇)

近頃閑談

所謂モデルの事

此頃——二週間ほど前から、森ヶ崎に来てゐる。

私の部屋の、硝子窓の附いた障子の外の縁側には更に硝子戸が箝まつてゐて、その硝子戸の外に夜は雨戸も閉まるのであるが、その雨戸にもそれ／＼硝子窓が附いてゐるものだから、天氣のいゝ朝の何時頃かになると、四角に切られた朝日のかげが、私の枕元を照るのである。そこで、私は起きて、障子を開けて、雨戸を開けて、海を見晴らすと、何をしに行く舟なのか悉く帆を張つた舟が、何十艘となく、全く海の面を蔽うてしまつてゐる程に、澤山浮んでゐるのである。彼女等は、もつとも、何方かに向つて走つてゐるのであらうが、何處から何處へ行くのか、稍一二時間ほどの間は、私の眼界の中では、次から次と現はれるものと見えて、廻り燈籠のやうに切れ目なく通るのである。さて、私のところから見ると、海と陸との境である堤防の上を一

人、二人と人が通つてゐるのも、三四町の距離なので、程よい程の影畫に見えるのである。それから、堤防と私の窓との間の、畑とも、叢とも附かない、野の間に散在してゐる釣堀では、もう彼方に一人此方に二人と、太公望のやうに坐つてゐるのが見えるのである。そして、その外に何の目を遮るものもない。甚だ平穩な景色である。随分東京を離れてゐるやうな気がする。私は寒くなつて、部屋の中に這入る。

いゝ氣持になつて、煙草を吹かしながら朝の新聞を見てゐると、ふと變な記事が出てゐるのを読んで、厭な氣持になつた。いふのは江口渙が『無数の寫眞機』といふ小説で、友人たちをモデルにして、悉くその本名を使つて發表したので、その被害者の一人である私が早速『ある家庭』といふ小説を作つて、渙が『無数の寫眞機』に報いたといふのである。もつとも、この噂に就いての記事は、これが初めてではなく、一ヶ月半も前に時事新報に、それから今月の『新潮』にも出たことがある。その度毎に不快ではあつたが、面倒臭かつたので黙つてゐたのであるが、今、一寸思ひつくまゝに辯解しておかうか。

二

丁度、同じやうな記事が、一ヶ月半ほど前に、時事に出た日のことである。江口渙がやつて来て、殊更らしく「失敬」と彼は肩と肩との間に手を擧げて、兵隊の敬禮の型をした。これは彼が『無数の寫眞機』に私の名前を使つたのを、失敬といふ意味に表現したのである。「ところで、何だ、今度君の書いた小説といふのは？」と彼は聞いた。その時はまだ私の『ある家庭』の方は發表されてなかつたのである。

「俺は今朝困つたよ、」と彼は笑ひながらつゞけた。「昨夜××社に泊つて、今朝起きたら二三の青年たちが、江口さん、あなたは女中を口説いた事があるんですか、といつてくすくす笑ふんだらう。譯を聞くと、今朝の新聞に、あなたが女中を口説いたら、その翌朝急にその女が姿を消したので、非常に心配して女中部屋を調べて見ると、蒲團の中に寢小便がしてあつたので、ほつと安心したといふ筋の小説を、宇野浩二が書いたと出てゐますよ、といふんだ。」

「さうだよ、あの話だよ、」と私はいつた。「つまり、君が口説いたといふのが附け足しなんだよ。そら、いつか君のところへ、そんな病氣のある女中が來た事があつたね。あの時、僕は君からその話を聞いてそれや小説になるね、君がその女中を口説いた事にして、といつたのを覚えて

ゐない？ 然し、あの時分は君の細君があゝいふ氣質の人だから、若しそんな事を書いて、その小説を本當にして、君が叱られちあア不都合だと思つて遠慮したんだよ。それにしても、今朝の新聞の記事で君が本當に女中を口説いたと思はれて、調戲はれたのなら、それや愉快だね。『無数の寫眞機』の敵討以上だつたね。」

「本名を使つたのかい？」と渙。

「まさか。君ちやアあるまいし、」と私。

「だつて、俺のあれは、却つて思はせぶりの名を附けるより、本名を附けた方が、人が嘘にするだらうと思つたからだよ。」

私は吹き出して笑つた。そしたら、彼も吹き出して笑つた。

——といつたやうな譯で、決して新潮不同調君たちがいふ如く、喧嘩小説ではないのである。そして私にしては、あの小説は、元よりそんなにいゝものとは思はないが、又そんなに愚作でもないつもりである。

さて、讀者よ、だから『ある家庭』の出來事は、『無数の寫眞機』の出來事がさうであるやうに、

全然作者の作り事であることを、友人江口渙の名譽のために、こゝに辯解する次第である。これを書き終つたところへ、偶然那須に行つて江口渙から葉書が來た。曰く「又こゝへやつて來た。大分寒いが我慢出來ない程ではない。山にはもう雪がある。然し風のない日は温か

だ。『女性改造』の君の小説、不同調がひどく憤慨したね。俺はあれを讀んで笑つちやつたよ。コレサ、オイ、宇野浩二、もうイタヅラはヨセヨ、オレモヨスカラ。但し女史はひどく怒

つてさうだ。女に恨まれると後がコワイぞ。太郎(犬の名)は郷里烏山にあづけて來た。別れる時には一寸可哀さうだつたよ。(下略)

(十一、十一)

文學研究の話

一九八

さて、又森ヶ崎であるが、或夕方、犀東日路士(假名)から電話が掛つて来た。日路士とは三四ヶ月以上會はなかつた。その彼が、増田篤夫と二人で遊びに行くが、差支はないかといつて来たのである。篤夫とも私は又三四ヶ月以上會はなかつた。來給へ、と私は喜んで返事をした。二人は共に私の十年來の舊友である。夕方から夜の十時頃まで、私たちは話し合つた。二人は共に佛蘭西文學の熱心な研究者で、現に日路士はこの春頃まで二年餘り向うの國に遊んでゐたものである。十年前、私たちが未だ學生であつた頃、私はこれ等の友達と、殆ど一つの本の一つの頁の上に額を寄せ合ふやうにして、佛蘭西の象徴派の諸詩人の詩を耽讀した。それ等の懐しい若年の頃の思出からでも、或は又私自身の好みからでも、私は今だにそれ等の諸詩人の詩を讀むことを樂みとしてゐるものであるが、さりながら、私が今も十年前のやうに、英語譯

と日本譯とで、辛うじて、自分の毎日の仕事の休みの暇々に、それ等を樂むといふに過ぎないのに比べて、この二人の友達はそれ〴〵立派に佛蘭西語を習得して、以來十年の間、少しも休まずにそれ等に没頭してゐると見えるのである。私は彼等に會ふ毎に、内心甚だ恐縮の感なきを得ない、何故といつて、その後私が文學を職業とする者の末席に列りながら、彼等から比べると、却つて私が文學を離れてしまつたやうな氣持を感じてならぬからである。

だが、舊友の誼の故に、私たちは會ふと互に何の反感も何の隔意も抱くことなく、恰も十年前のやうに、至つて純粹な心持で文學を談ずる事が出来るのである。そして私は自分の乏しい佛蘭西文學のありたけの智識を、遠慮なく曝け出して、彼等の説を叩いたり、教を乞うたり、又私の意見を述べたりすることも出来るのである。

「君は中々勉強してゐるんだね、」と篤夫が半分冷かすやうにいふのである。

「だつて、僕は元々文學が好きなんからね」と私も笑ひながらいふのである。

(雑誌「日本詩人」十一年九月號、増田篤夫「私が觸れ得たクロオデル」及び犀東日路士譯「生ひたち(ラムボオ)」参照。)——これ等はそれ等の私の友達が近頃書いたものですと、私がこゝで廣

告して、彼等の爲に自慢しても決して恥づかしくないものである事を紹介しておく。

二

一三日一寸東京の家に歸つてゐた或日の午後、珍しく芥川龍之介が現れた。龍之介とは半年以上會はなかつたので、嬉しかつたが、彼の顔を見ると、甚だ元氣のない様子なので「何處か悪いんぢやないか？」と聞くと、「悪いんだ」と彼。「どうだ、忙しいか？」「相變らずだ」と私。「何處が悪いんだ？」「神経衰弱だ。少し書く事を止めて、近いうちに何處か温泉にでも出かけようかと思つてゐる。」

そして、二三時間無駄話をしていつものやうに二人で散歩に出る事もなしに、甚だ呆氣なく別れた

その晩、森ヶ崎へ歸つて來ると夕飯の時に女中が、「塚……利彦さんといふ方御存じですか？」と聞いた。

「名前だけしか知らない。どうしたんだ、その人？」と私が聞くと、

「いえ、隣の病院に、身體が悪くて入院してらつしやるんです。」そして女中は又暫くしてから、

「宮地嘉六さんて方御存じ？」と聞く。

「知つてるよ。どうしたの？」この間から下の部屋に入らしつてたんですけど、今朝、一寸東京へ行くつて、お出かけになりました。丁度あなたのお留守中の間でしたわ。何だか一生懸命に書いてらつしやいました。」

その翌日の午過ぎ、頭が重かつたので、床の中でうとくしてゐると、下の廊下の方で

「は……いえ……え、又出直して來ます、」といふ聲が聞えた。私はうつ／＼しながら

「あ、宮地君の聲らしいな、歸るのかな。久し振りだから、一寸會ひたいな。今に上つて來て障子を向うからコツ／＼と叩かないかな、」などと思つたまゝ、つい眠り續けてしまつた。後で聞くと、やつぱり宮地君が一寸歸つて來て、引上げて行つたのださうだ。

前記、増田、犀東の二人が電話をかけてやつて來たのは、その晩のことであつた。

私は自分の頭が鈍なせゐるか、それ迄、そして多分今でも、文壇とか文壇的とかいふことを、そんなに重苦しく考へたことはないが、例へば私の友達の芥川にしても、宮地にしても、或は谷崎にしても、廣津にしても、或は又私自身に就いても、いつでもさういふ人々が集つた場合を考

へて見ると、成る程、この増田や犀東やとの場合と比べて、やつぱり文壇的といふのかなア、と考へた。つまりそれが職業の持つ臭といふものであらうか。

「君はクロオデルをどう思ふ？」と増田篤夫がいつた。

「何だか難しさうだから、英譯も少しはあるやうだが、僕は讀まず嫌ひだ」と私が答へると、彼は苦笑しながら

「君そんな事をいはずに讀んで見給へ」と彼はすゝめた。

私が雑誌「日本詩人」を求めて、「彼の私の觸れたクロオデル」を讀んだのは、その翌日のことであつた。それを見ると、クロオデルの難解なことは、有名なクロオデル研究の著者トンケデツクでさへ、それを嘆じてゐるさうであるが、我が篤夫は「前代象徴派の作品に或程度まで親しんで、所謂 *Art difficile* の晦い味を嘗めた」彼にとつては、それ位の事は何の苦にもしないといふ意氣込みで、彼は彼の「觸れえたクロオデル」を諄々と説いてゐるのである。私はそれを讀んで、前の日彼に讀まず嫌ひだといひ放つたことが、彼が傍にゐないのに、甚だ恥ぢて考へられた。それと共に、それに依つて、この詩人に關して私の反感がどんなに間違つてゐたか、そ

して私たちにこの詩人がどんなに讀むべき價值があるかを教へられたかを知ることが出來た。彼はその論文に於いて、前記トンケデツクが「生なかの勇氣を以てしては、この事（解釋すること）は困難であらうと信ずる」と言つてゐるところの、クロオデルが「春と夏のあはひの時」といふ詩に就いて詳細を極めて解き、且つ味ひ、且つ語つてゐるのである。

彼は私と同年で、而も私よりずつと病身で、殊にこの春の頃などは二ヶ月以上可成り重い病床に就いてゐた。が、彼はその病床で、この「春と夏のあはひの時」を讀んだらしいのである。私はその熱心にも驚されない譯には行かない。

その時、話の次手に、彼がいふには、「この前の週、犀東君等と『佛蘭西の夕』といふ會合をこしらへて、一週間、近代の佛蘭西詩人の代表作を讀み合つたんだよ、犀東君が先生でね。君に知らしたらよかつたね。」

「今度あつたら是非知らして呉れ給へ」と私はいつた。

年三十歳を過ぎて、世間の人たちは家庭の事や、金錢の事や、女の事やで心を勞してゐる時、この人々が依然として十年前の文學青年のやうに、文學を研究してゐるといふこの話は、少か

らず私を感動させた。孔子の言葉に、徳を好むこと色を好むが如きものを見ず、とか言ふのがあるが、私は文學を好むこと色を好むが如きをこの友達に見て、感嘆の餘り一寸こんな風に書いたのだが、若しこの人たちが私のこの文章を見たら、赤くなつて怒るだらうと思ふ、が、許し給へ。

(十一、十一)

信濃の國の顔

—

人と、その生れ國とか、育つた所とかいふものは、妙な因縁があるものと見える。何處でもいふことだが、例へば大阪あたりでは、あれは江州の人間だからけちだとか、或は丹波の人は頑固だとか、何國の人は斯うだとか、終ひにはそれが、氣質に關してばかりでなく、顔などに就いても、大和の人間は頬骨が出てゐるとか、河内の者は鼻が低いとか、いふやうな事まで言ひ觸らされてゐる。それが私には、一白の人はどういふ氣質であるとか、一黒の酉年生れの人には斯ういふ氣象であるとか言ふことが、往々當る程度で當つてゐるやうに思はれるのである。

さて、徹頭徹尾愚かな話をするが、私に、信濃の國の或町に出かけて行つて、その女に戀をする男のことを書いた、同じ材料の小説が四五篇もあるが、(拙著、小説集「我が日我が夢」参照)それは元々小説のことであるから、斯ういふ實際の話と混同していふのも妙な話であるが、

その中でいつも女主人公として出て来る「ゆめ子」といふ信濃の女の顔に就いて、彼女は色は何方かといふと黒くて、しやくれ顔で、目附はばつちりといふ代りに、寧ろ細くて、沈鬱で、……とこんな風に小説的に細かくいふと間違つて来るが、要するに戀する者が見ても、彼女を美人だと推薦することは出来ない顔立なのであるが、ところで私の考へでは、どうもそれが信濃の國の女の顔の一類型であると見ることを、これから話したいと思ふのである。一口にいふと、信濃の國は美人の國ではないのである。

氣質からいふと、彼女は無口で、どんな苦しい事でも黙つて辛抱し、どんな嘆きも不平も悉く自分の胸の中に藏して現さない底の女性であつた。そして更に女に珍らしいことには、私は今まで私の知れる限りで、彼女くらゐ、他人の兎や斯くと悪い噂をしない、そして自分といふものを吹聴しない點で、つゝましい人柄を見たことがない。——これは私の保證の限りでないが、信濃の女は大體斯ういふ氣質を持つてゐるのだらうか？

彼女の身分は藝者で、今年二十三四歳で、従つて未だ定つた夫を持つた事がないらしく、それで今は二人の子を持つてゐる、その二人の子供は一人の男の子か、別々の父を持つてゐる兄

弟か、それは私の知るところではない。ところで、私と彼女との關係は、唯客と藝者として知つてゐるといふ以上のものではない。だからこそ、私は四年前に初めて彼女を見た時と、四年後の現在と、少しも變らない、人が見たら中々阿呆らしくも見える程、小説でも、斯ういふ隨筆でも、こんな夢のやうな氣持で、彼女に就いて話すことが出来るのである。

ところが、去年の暮に、彼女はその二人目の子を生むのを機會に藝者を止めてしまつたのである。彼女は抱へ藝者でなくて、その家の娘なのである。だから恐らくもう私は、偶然の外には、彼女を見ることがないかも知れない。私は今年になつてから彼女の住んでゐる町に一度と、同じ國の他所の土地に一度と、併して二度も出かけて行つた。暇さへあると、又しても私の足が信濃に向くのは、一つには私には信濃の山の景色が、ふと思ひ出すと、矢も楯も堪まらなく行きたくなる程好きだからでもあるが、然し山と、やつぱり私の夢の女を見たいが爲に外ならぬのである。信濃に行くと、當の「彼女」を見ることが出来なくても、信濃を走る汽車の中でも、ふと或プラツトフォームに立つてゐる製絲工場の女工風の女とか、さては或停車場から乗り込んで來た奥さんらしい風俗の女とか、至る所で私は屢々はつと驚く程、彼女に似た顔

に出遭つて驚くのである。

英のアーサー・シモンズの名著「象徴派の文學運動」といふ本の中に、ゼラルド・ヌルバルは生涯に唯一人の女しか戀しなかつた、だが、實際にはその外に例へば松子とか、竹子とか、梅子とか、數人の女との戀愛事件を持つてゐる、けれどもやはり彼は一人の女しか戀しなかつた、何故なら、松子も、梅子も悉く彼の最初の戀人の似顔の持主に過ぎなかつたからといふ話がある。これは何も珍らしい話ではなく、恐らく戀した程の、大抵の人が經驗するところであらう。そして、即ち私も亦、ド・ヌルバルが亞流であるか？——違ひないのである。だが、それと共に客觀的にいつて、信濃には數多の「彼女」に似た女がゐるといふ話を私はしたのである。

二

半年程前のこと、私がいつも錢湯に出かける途に、間口一間程の小さな酒屋らしい者が出来て、ふと看板を見ると、信濃屋と書いてあるのに私は目を止めた。多分信濃から出て來た人で、出世しようとしてさういふ店を開いたのだらう、と思つて、見て見ると、果して陳列棚の中に、信濃名産かりんの罐詰などが澤山並んでゐる。私は錢湯の往復に、その前を通る度に、それを

見て信濃のことや、信濃の彼女のことやを考へることを楽しんだ。と、一週間程の後のことであつたが、その店のお上さんらしい、二十一二歳の女が、向う向きに何か用事をしてゐるのか、どうもその女の顔が、私の所謂信濃型のやうな氣がしてならないものだから、歸りの時一層注意を拂つて見て通つたが、その時はもう女は奥に這入つたのか見えなかつた。其後見たところに依ると、果して信濃屋のお上の顔が「彼女」に似てゐたのに、私は豫期しながらも甚だ驚かされた。「彼女」が藝者でなくて、斯ういふ小商人の内儀であつたなら、恐らくこの女のやうに見えるだらう、と私は、その後、そこを通る度に思つたことであつた。

すると、これは今から二三ヶ月前の話であるが、或晩、私は友達と二三人で平和博覽會の賣店の通を歩いてゐた時に、先のと例を長野縣の賣店で見したのである。不思議なことに、その時も、その店の番をしてゐたその二十一二歳の女は、何をしてゐたのか、店の前に立つて、後向きに品物の上に身體を屈めてゐたので、顔は見えないのだが、その女の恰好を見て、ふと私はこの女の恰好に見覚えがある、といふやうな氣がしたのである。——これは信濃の女に違ひない。が、友達の手前、その前で立止まつて見究める譯には行かなかつたので、私は甚だ不

本意を覚えながらも、その前を通り過ぎて行つたが、どうかしてその女の顔が見たくて、私は過ぎ去つてからも幾度振り返つたか知れない。その中に到頭賣店の向うの端に出てしまつたので、私は友達に作り事をいつて、もう一度その前を歩いてもらふことにした。しかし二度目に通つた時も、例の女は先と同じ姿勢をしてゐたので、その時は遂にその顔を見ることが出来なかつたが、その翌々日だつたか、私は外出先から歸りに上野の山下で電車を下りた時、ふとその女を思ひ出してわざ／＼廻つて見た。

その時は女は店のところに、ちやんと通に向つて坐つてゐた。私は驚いた。それは先の信濃屋の場合より同じ信濃型でも更に一層「彼女」によく似てゐるのである。その時、私は通りがりに、何気なくその女と目と目が行き合つたやうに思へた。と、どういふ譯か、まるでその女が私の腹の中を悉く知つてゐるやうな氣がしたものが、變に恥かしさを覺えて、私は赤くなつて、大急ぎで足を早めたものである。

三

さて、一三日前の晩のことであつた。私は有樂座に、久米正雄の「三浦製絲場主」を見に行つ

た。私が行つた時、丁度第二幕目の、音羽かね子の製絲女工が、病院に這入つてゐる場面が開いたところだつた。脚本にはどう書いてあるか知らないが、製絲工場と言へば、私には前にいつたやうな關係から忽ちそれを信州のものにして考へられるのである。すると、今迄何にも思はずに見てゐたかね子の女工に扮してゐる顔が、俄に例の信濃型に見え出したのに驚いた。いふ迄もなく、音羽かね子の舞臺は私もこれ迄幾度も見て來たが、嘗て一度も彼女の顔をそんな風に感じたことはなかつた。恐らく彼女は私が先に信濃の女の顔の型として擧げたよりは、目鼻立に於いても、顔立に於いても、すつと上等のものであらう。だが、あの芝居でそんな風に私にだけ見えたのは、私にだけ成功してゐると思へるのである。

あの多少薄暗い光線の下で、即ち舞臺右手の窓を通して射して來る光線の縞を浴びて、彼女の顔に明暗の隈が映る瞬間など、失禮な話だが、私がこれ迄見た「彼女」の似顔の中で、これ程美しく且つそれ程よく似たのは見たことがないと思つたのも私の慾目か？ やがて幕が變ると第三幕目で即ち三浦製絲場主に見出されて、その立派な家の座様になつてゐるところであるが、そこで苦勞するところ、それが我人ともに歓迎しないところの子を孕んで苦勞するところ、そ

の度に沈鬱な表情をして、俯向いて悲しむところ、さて最後の幕では、暗い夜の町を子を腹に持つてしをくくと歩いて行くところ、悉く考へて見ると、顔が似てゐるやうに、あの芝居に出て来るかね子の扮した女性の身の上と、私の「彼女」のそれとが甚だ似てゐるのである。

だが、こんな事をくどくど言つてゐると、これではやつぱり信濃の女の顔に類型を認めるといふよりは、ゼラルド・ヌルバルの亞流と言はれる方が當つてゐるかも知れない。

——「今年の夏は何處へお出かけですか、——やつぱり信州の方ですか？」と昨日或雑誌の記者が「行かうと思ふ避暑地と、それを選んだ理由」といふ問題をもつて談話筆記に來た時に、斯う聞いたのである。

「さあ、そんな譯で、又信濃の顔でも見に行きますかね、この夏も、」といつて私は以上のやうな話をしたのであるが、話してから、「いや、こんな馬鹿な話は書いてはいけませんよ、」と斷つたのである。それを今つい書いてしまつたのである。

(十一、六)

懺悔告白の流行

—

今日は又別の或雑誌記者が來て、懺悔といふことに就いてどう考へるか、懺悔はいふ事か悪い事か、安價な懺悔と高價な懺悔と、懺悔は告白した方がいふか、告白しないでも唯後悔しただけでいふか、さては又近頃流行る懺悔告白文學に就いて、どういふ考を持つてゐるか、と例に依つて帳面と鉛筆を持出して、私に感想を迫るのである。

さういふ風に聞かれて、何よりも先に私が氣が付いたのは、私は實は懺悔といふ言葉をよく知つてゐなかつたといふ事であつた。といふのは、私は、懺悔といへば教會基督教徒がするやうに、といつて私自身見たことはないが、何でも大勢の前で後悔した罪を告白するものだ位に思つて居たのに、この訪問記者のいふことに告白した方がいふか、告白しないでも後悔しただけでもいふか、と聞かれたのを、告白しない懺悔といふのがあつたんですか、一體懺悔といふ

言葉の意味の定義はどういふんですか、と私が聞き返すと、さあ？ と彼も亦全くよくは知らないと見えて、詰まつてしまった。

仕様がないので、私は所有の唯一の字引であるところの、三省堂発行「國漢文辭典」といふのを引いて見ると、それは佛教から出た言葉で、過去の罪を全く後悔すること、と書いてある。即ちこれで見ると、私がこれ迄懺悔といふものは、告白して始めて成立つやうに思つてゐたのは、或は基督教だけの謂ひかとも思はれるし、又基督教でも告白しないでもいゝのがあるかも知れないし、少し間違つて覚えてゐたと見えるのである。

だが、恐らく人と生れたものが生涯の中に幾度となく自分の犯した罪を後悔して、後悔しただけでは胸が晴れなくて、それを人の前で告白したいと思ふ氣持になるのは、それは至つて自然な道かと思はれる。私などの考では、誰でも初のうちは同じ懺悔告白をするにしても、随分嘘を混ぜたり、見えを張つたりすることだらうか、十度よりも二十度、二十度よりも三十度、と度重なれば次第に本物に近づいて行くであらう事は、町角のわざと人目のつく所で祈つたり、わざと行ひ澄ましたやうなことを言つたり、書いたり、行つたりしてゐても、長年それをつゞ

けて行くうちには、多少本物に近くなつて來るであらう事と同じである。教會基督教徒的な、白々しい懺悔告白でも、私はさういふ意味で認めるものである。恐らく私たちの文學といふものでも、元を訊せばこの心持から、流れ流れて出た一派に違ひない。

斯ういふ事をいつてゐるうちにふと思ひ出したのは、私の中學時代の或夏の日、大和の國の大峰山といふ、役の行者の開いた山へ上つた時のことである。この山に上るには、大抵先達と稱して、大峰講とか何とかいふ講中の信者で、毎年一度は信心の爲に上るといふやうな人を頼んで、連れて行つてもらふのが例になつてゐる。さういふ山のことであるから、山中には「西の覗き」とか、「蟻の戸渡り」とか、「平等岩」とかいふ、色々な行場があつて、當時は私たち中学生でも、この山に上ると言へば、唯の登山とか旅行とかいふことの上に、多少さういふ信心的な行をしなければならぬといふ考を、念頭に置いて出かけたのである。無論、山は女人禁制で、山中では一切茶食の規則で、間違つて、女が上つたり、肉食をしたりすると、屹度山が暴れるといふことを、山の人たちの間では固く信じられてゐた。——その山に上つた時の記憶である。暑さの折から、斯ういふ話も時にとつて宜しからう。

吉野の山を過ぎて、愈々大峰にさしかゝるところに、一つの六角の形をした堂があつた。何といふ堂だつたか、その名を忘れたが、「これがまあ、大峰山の入口といふやうなところですよ、」と言ふ先達に連れられて、私たち、四五人連であつた學生は這入つて行つた。這入る時に、先達が、みな銘々の帯をつかまへて、一列になつて下さい、と變な事をいふと思つたが、なる程、堂の中は眞暗で、明りもついてなければ、外の光線も洩れない、本當に鼻をつまゝれても分らない眞の暗であつた。その中を帯に依つて縦列を作つた私たちの先頭の者が、先達の帯をつかんで、變な所だな、と口々に中學生の笑ひ方で笑ひながら、目を開いてゐても閉つてゐても同じことなので、みんな目を閉つて、前の人の帯に捉まりながら歩くのである。先達がいふには、「片手で前の人の帯を持つて片手でお堂の壁を觸りながら歩きなさい、そして私の唄ふ歌に附いてうたひなさい。」

「何とかや、」と彼は變な節を附けて、歩きながら唄ふのである。そして私たちは行軍する兵隊のやうに「何とかや、」と一節づゝ、彼の歌について唱ひながら、前の人の帯を持つて片手で堂

の周囲の壁を探りながら目を閉つて歩くのである。さういふ風にして、何の事だらう、こんな馬鹿な眞似をさせられて、と輕蔑しながら、大凡堂の中を二廻りもした時分に、いきなりぢやん／＼／＼がん／＼／＼と天井の邊で破鐘を亂打するやうな音が起つた。

實際、そんな暗がりの中を、目を閉つて歌を唱ひながら歩いてゐる最中に、そんな突然の、非常識な音が突發したのであるから、私たちは一瞬間、はツと息が止まつたかと思へる程吃驚した。が、それと共に、下界から持つて來た不淨の氣がすーツと散つてしまつた氣がしたのも事實である。

その時の先達が唱へた歌は、何でも「何とかの塔や伽藍を建てるよりも、懺悔にまさる功德はない」といふ意味の歌で、その後、金槐集を読んだ時、偶然それと同じではないかと思へる歌を發見したことがある、どうも同じ歌だつたやうに思ふ。……そこで懺悔の話であるが、つまりこの歌の中で謂ふ懺悔は、やはり後悔の部に屬するものに違ひない。

やがて、大峰山の行場に來てからのことであるが、先にも言つた「西の覗き」といふ行場では、絶壁の上に腹這ひになつて、こゝでは大先達といふその行場專屬の案内者に、兩方から帯

を持つて支へられたがら、その絶壁の先から顔と手を突出して、その下の岩の間にあるといふ
 祠か何かを拜むのである。絶壁の下は大抵の日は雲がかかつて見えないが、晴れた日だと下の
 方の杉の森が苔が生えてゐる程に見えるさうである。無論、行する者には、祠などあるのかな
 いのか、見廻す餘裕はない。私たちは唯ふるへながら、手を合はしてゐると、その時大先達が
 「親に孝行せねばならぬ」、「嘘を吐いてはいけませんぞ」といふやうな事を、嗚りつけるや
 うに宣告する。私たちは唯恐れ入つて、返す言葉なく、唯一層身體を固くして、合掌してゐる
 手に力をこめるばかりである。やはりその時、背後の方で先達が「有難や西の覗きで懺悔して
 何とか彼とか」といふ三十一文字の歌を、節を付けて唱ふ。そしてそれが終ると共に、行する
 者は、搦まれてゐた帯に依つて、後の安全な場所に引戻されるのである。

その時のほつとした氣持の何ともいへぬ有難さは眞に言葉の外で、これからは山を下りても、
 決して悪い心は起すまいと誰でも心に思ふことに違ひない。そしてこの時の歌の中の懺悔とい
 ふのも、成る程後悔といふのに近い氣持であらうか。基督教の懺悔とは違つて、佛教の立場か
 ら懺悔といふ言葉の本來の意味を説明しようとする、逆もさう一口に言へるものではないと

或人が言つたのを聞いたことがあるが、成る程さうかも知れないが、つまり何とか堂の闇がり
 で破鐘の音で氣を抜かれた時とか、西の覗きで大先達に宣告された時の氣持とかは、多分それ
 を説明するものであらうか。

——基督教の懺悔と佛教の懺悔とは、謂はは告白するとしなひのと言ふ程の違ひがあるん
 かね、尋常科と高等科程の違ひがあるんですかね。僕はそのどちらにも賛成ですが、お尋ねの
 告白文學などいふのは、つまりその前者の方ですかね。——

と私は訪問記者に向つて大體こんな話をして、これは書いてもいゝと言つたのである。來月
 あたりその雑誌に出る私の談話とこの文章は多少重複するかも知れぬが、つい書いてしまつた
 のである。讀者の寛恕を乞うておく。

(十一、六)

『桃源にて』を讀んで

三三〇

九月の「改造」に武者小路實篤の『桃源にて』といふ戯曲が載つてゐる。三幕物で、第一幕、見渡す限り桃の花盛りの山の場で、主人公の男がその弟の少年に「天下にこんな美しい桃の山があるでせうか、」といはれて、「ないかも知れない、あるかも知れない、」と武者流に答へていふには「しかし益々美しくすることはいくらでも出来る、人間の力の限りをつくしたら、この山の何倍も美しい山をつくり出すことが出来るだらう、たゞさういふ人がこの世にゐないだけだ、私はこの仕事をやり出した以上は美しい上にも美しくする、そしてこんなに美しい桃の山を見たことはないといふ仙境をつくつて見せる。」

しかし、間もなく此の少年がその愛する少女をかくまはうとして、數人の荒くれ男たちを救き、終には兄である男をも欺いた爲に、折角の桃の木が片つ端から彼等に切り倒されるやうな

事件が持ち上る、尙、そればかりでなく、その切り倒された桃の花が、そこらの川の中に落ちて流れたので、折柄同じ山中に獵に出てゐたその國の王様の目にとまつて、王様は家來の者たちを連れて、そのみなもとを尋ねて来る、そして荒くれ男たちを追拂つて、代りに残つた桃の木をことごとく自分の離宮の庭に移さしてしまふ、といふやうなことが起る。後に、主人公の男は抵抗する力もなく、泣き入る中に第一幕終り。——私はこゝ迄を八月末日に讀んで、そのまゝになつてゐた。

ところが、翌九月一日にあの大騒動が起つた。私も家の者や、町内の人たちと一帯に、家の前はせまいので、近くの寛永寺の境内に逃れて、そこのとある木の下にごさを敷いて避難した、もう初めの時以上大きな地震はないだらうとは思ふものゝ、絶えず襲うて来るところの餘震が甚だ氣持が悪かつた。が、私たちの町の方ではまだその時分は火事の心配を殆ど知らなかつたので、こゝなら當分大丈夫だらうと思ひながら、私はござの上に両手を頭の下にかつて、仰向に寝轉んで、天を見てゐた。天は半分まで下町の火事の煙で恰も密雲に蔽はれてゐるやうに見える、後の半分は澄み切つた青空だつた。時々顔を横に向けると、淺草の方から火事を逃げて來

た人々が、荷物を負つたのや車につんだのやが、次第々々に密集して、寺内を奥へ奥へと通過して行くのが見える。又すぐ傍には一番低い所に出てゐる木の枝の下に、私と同じ町内の住人である、顔なじみの柳家小さんが、いつ見ても動かない恰好で藤椅子にもたれてゐる姿が、置き物の木像のやうに見えるのである。だが、いつ迄さうしてゐても仕様がなないので、やがて私は家から二三冊の雑誌を持出して来て、自然先の『桃源にて』の読み残りを讀みつゞけた。

第二幕では、先の幕で折角二十何年の丹精を跡片もなくされた主人公が、悲觀落膽して川邊で釣りをしてゐるところへ、老人が現はれて、どうして君ほどの者がそんなに情けてゐるのだ、と慰める。しかし男はもうすつかり落膽してゐて、いくら植ゑたつて又持つて行かれてしまふから、と嘆息する。そこで老人がいふには、「持つて行くのを君の力でとめる事が出来なければ持つて行かれるのに君の責任はない。だが生きてゐる限りは、自分の仕事を止めるのは恥だ。生きてゐる間は失望することを知らない男であつてほしい。死ぬまではいくら切られても、折られても又生きかへる男であつてくれ、さういふ男のゐてくれるのは人間に生まれたよろこびなのだ。」といふ。

二

その時、又ぐらぐらと大地を震はす揺り返しが來た。「おゝ、」とか、「あゝ、」とか、或はその何れともつかない、一種の呻き聲がそこらにゐる無数の人々の口から洩れて來る。無論、私も讀んでゐた雑誌を傍において、半身を起して見た。目に觸れる限りのどの人の顔にも憂色が充ちてゐた。そしてそれらの人々の中の最も近くに見えるわが柳家小さんの顔も、不斷に見る彼の顔が如何にも恐い表情をしてゐるが、然し恐い中に絶えず一種のユウモアの感じられるのが、今、それは一瞬間嘗て見たことのない緊張した表現をした。天の煙は益々濃くなり、且青空の部分も少くして行く。今になつて考へて見ると、彼、小さんは今度の事を境にして隱遁生活をするとその後發表した位であるから、彼も亦舊時代の日本人の一人として、あの地の震動と、天の黒煙と、人々の騒動を見て、頗る無常隱遁の心を起したのであらう。

だが、幸か不幸か、彼よりも年齢でいふと半分以上も下であるに違ひない私は、その反對の心持になつてゐた。私、その者は平素は自分でも可笑しい程臆病者である癖に、自然今度の地震にも人後に落ちない程驚いたらうが、何故か無常感などは起らなかつた。無常といへば、却つ

て地震前の、安樂に疊の上に寝そべつて、私並の贅澤な暮しをしてゐた時の方が、屢々さういふ氣持の起つて来るのに惱まされた。やがて九月一日が暮れ、二日過ぎ、三日と經つと共に、私は歩いたり、勞働したりする必要に迫られると共に、益々自分でも分らない、不斷思ひも及ばなかつた勇氣を自分の内に感じさへした。つい話が横道に這入つたが、再び「桃源にて」にかへると、例の老人が落膽した男にいつてゐる。「君はあの切られた桃から生え出したあの元氣のいゝ芽の美しさをよく見ないのだね。君はこの木が大きくなつた時のことを考へるから大へんなのだ、この小さい芽を出すその勇氣に感心し、この小さい芽の美しさに感心すれば、これだけどの位美しいものか知れない。私はこの桃に禮拜する。」そして老人はお辭儀をするのである。

「失望したり、自棄をおこしたり、一寸した事で勇氣を失うた話を聞くと私は腹が立つてくる。それが人間と云ふものだ。その力がなくつて、人間は進んでゆけない。參るのも人間だらうが、それで折れないのも人間だ。」そして男は「桃の木をさすりながら、あかす芽を眺め、」「この美しさ。私もお前に負けないよ。お前は私の先生だ。私はやり抜く、」斯う叫んで、第二幕終り。

果して、第三幕では第一幕よりも、山々の桃は美しく咲いてゐて、そこに男と老人とが坐つてゐる。「私はすべて何かに任せてゐました。萬事あなたまかせの春のくれ、そんな氣持で、ゆつたりとした氣持で仕事をしました。あんまりこの景色に執着すると、又嵐がやつて來ないとも限りません。だが私は安心してたのしめることをよろこんでゐます、」と男はいふ。「何しろ愉快です、」と老人が言ふ。(こゝらで音楽があつてもいゝ、と作者は割註してある。)そして最後に第一幕に出た少年と少女とが、立派な武士と妻とになつて出て來て、昔の罪を主人公に詫びる。主人公は答へて、「何事が出來ても恐れないで、お互に進んで行かう、私は死ぬまでこの山を美しくするだらう。お前は、お前の信じた方に戦つてゆけ。さあ二人とも腰をかけて祝杯を上げよう」で、幕。

三

恐らく戯曲「桃源にて」の主意は作者武者小路實篤が彼の「新しい村」の仕事に對する感想や抱負を盛つたものであらう、いふまでもなく彼の新しい村こそはこの桃源に比べられて然るべきもので、我等の東京市などをそれに當嵌ることは甚だ不當であるかも知れない、まして桃源の

桃の切り倒された話とは事變り、かゝる東京の此度の災厄は天の仕置と見做されるべきが至當かも知れない、だが、あの二日二晩に渡つた大火災が消えた後、殆ど一週間といふもの、夜になると遙か地平に二筋三筋死人を焼く赤い煙が見らるゝ外に、眞に暗闇の原になつた東京に、一日づつ彼方此方に螢のやうな燈火が輝き始め、さては彼方の隅、此方の角に掃除の音が起り、金槌の音が聞こえ始めたのを見ると「參るのも人間だらうが、それでをれないのも人間だ」とある『桃源にて』の言葉を借りて來ても、恐らく作者の本意にそむくものではないだらうと私は信ずるものである。

十日程たつてのこと、私が或所を歩いてゐると、町には戦場のやうに砂煙が立つてゐて、いづれも汗と塵とにまみれた人たちが祭のやうに往來してゐた。何様、それは空前の災難に襲はれた町の有様らしく見られた。が、感すべき事は不斷の日よりは人々が一層行儀正しく左側を通行してゐることであつた。そしてふと或商店の前を通り掛かると、「今日は十一日です」と大きな紙に書いて硝子戸に貼りつけてあるのを、人々は悉く感慨深さうに読みながら通るのであつた。或時は又、夕方或處の焼跡を通つてゐると、焼灰山と見過ごしてゐたものゝ中から突然人

聲が聞えたので、私は驚いてその方を注意して見ると、そこに焼亞鉛でこしらへた蒲鉾型の小屋があつて、中に妻らしい女が破れ瓦を積んで造つた竈に火を起して鍋を掛けてゐる傍に、夫らしい男が頻に材木を削つてゐるのであつた。それもこれも『桃源にて』の中の老人が「この小さい芽を出す、その勇氣に感心し、この小さい芽の美しさに感心すれば、それだけでどれ位美しいものか知れない。私はこの桃に禮拜する。」といつたのに當嵌めて無理であらうか。そこで私も亦『桃源にて』の中の老人が桃の木にお辭儀をしたやうに、それ等に向つて涙ぐんだ目で挨拶したものである。

武者小路實篤は以前よくその感想文の中で、人類に力を與へる藝術とか、人類に喜びを齎す文學とかいふことを言つた。その通り、私は折も折、丁度このやうな危急の秋に偶然發表された彼の戯曲『桃源にて』を読んで、私——即ち人類の一員である者に、力と喜びを與へてくれたことを感謝したのである。のみならず、私はこの際多くの悩み傷ついてゐる東京の人たちに、『桃源にて』を一冊づゝ配つて廻りたいとさへ思ふものである。とりわけ私の同じ町内の住人である柳家小さんに、それから私の友人である安成二郎に、それから内藤辰雄に。——何故？

それは多分甘粕事件が新聞に発表された日だつたと思ふ。午後二時頃、私は麻布霞町へ行つた歸り途で、四谷見付をあるいてゐると、ふと麴町の方から走つて來た自動車の、運轉臺に乗つてゐる男と顔を見合した。

丁度その自動車が私のあるいて行つた邊でとまつたので、私は勢ひよく「やあ！」と聲をかけた。すると運轉臺にゐた男も「やあ！」と應じたが、それがその男のいつもに似合や甚だ元氣のないそれなので、私は不思議な氣がした。なぜといつて、その男——安成二郎は、いつ見る時でも何方かといふとにこ／＼した、愛想のいゝ男だからである、現にあの地震の一週間ほど後神田の通であつた時だつて「やあ、大變だつたな、どうだい？」そしてにこ／＼してゐた。

『豊葦原瑞穂の國に生れ來て米が食へぬとは嘘のやうな話』又『上の子の著物著せよ』と思ひしに生れたる子にちんぼこがなし』等といふ歌の作者である。彼ならばたとへ地震で家の下敷になつても「何とか何とかこの餘」とでもいひ返して笑ひさうなものである。それがその自動車の上で笑はぬのである。

「何處へ行くの？」と、私はその時初めて彼の乗つてゐるのが、貨物自動車であるのに氣がついた。

「君、落合へはどう行くんだ、知らないか？」と彼はむつ／＼して聞いた。

「知らないね、」と私は答へながら、氣がつくと、彼の自動車が止まつたのはその爲らしく、運轉手が今最寄の交番へ道を開きに行つてゐるのらしかつた。「落合なんて、どうして？ 社の用事？」と私が尋ねると、

「大杉だ、」と彼は相變らず私が初めて彼に見たやうな、嚴肅な顔の表情を少しもあらためないで、顔を後の方にしやくつた。

私が彼のその言葉に、後を見たのと、そこに、つまり貨物を載せるところに、白木綿を掛けた棺らしい箱と、その傍に一人の男が、これ又安成君以上の嚴肅な顔をして蹲んでゐるのを發見したのと、さうだ、今日の新聞にあつた甘粕事件の犠牲になつた大杉榮の何だな、と思つたのと、大杉君と安成君とが親しい友人であると思つたのと、總て同時だつた。

「おゝ、」といつて、私も忽ち嚴肅な顔になつた。が、私は今の先までの、不斷の安成二郎に會

つた時の調子で話した態度を、急に改めるのも恰好が悪いので、「ぢやあ、お辭儀をしやう。」と出来るだけ何氣なささうにいつた。そして私は後に廻つて、帽子をとつて、棺に向つてお辭儀をした。

私はこのごたくした人込の中で、貨物自動車に載せられた不幸な社會主義者の棺に向つて、私が禿げ頭を曝らしながらお辭儀をする恰好を、彼一流の歌の文句で批評するだらう、などと考へたが、二郎は相變らず黙然として私の方を振向きもしないのである。

さて、私が再び自動車の前に戻つて來た時も、まだ道を開きに行つた運轉手が歸つて來なかつたが、さういふ場合で外に話の材料もないので、私はふと思ひついて懷中寫眞機を出して、「君、寫すよ。」と二郎に斷ると、彼は相變らず嚴肅な表情をくづさないで、うなづいて、私の後の方を指すやうな恰好をした。それは何を意味したのか、もつと後に寄つて、自分たちでなく後の棺を中心にして寫せといふつもりか、よく分らなかつたが、取敢ず私は二三枚をカメラに收めた。

やがて運轉手が歸つて來て、自動車が動き始めた。「さよなら」と私は二郎にいつた。が、返事

は聞こえなかつた。私は白木綿に包まれた棺に向つてもう一度お辭儀をした。その棺の傍にしゃがんで私を睨んでゐたのは、多分大杉君の令弟であつたらうか。私は暫くの間、その自動車の後を見送つた。

さて、安成二郎よ。友達をあんな不慮の死に死なして残念であらう。然し、いふ迄もないことだが、死んだ者はかへつて來ない。そのために生きてゐる我々がいつ迄も力を落してゐては、却つて死者が浮ばれぬであらう。お互にお互の道を勉強しようではないか、そこで「桃源にて」を勧める所以である。

五

安成二郎に會つた同じ日であつたかと思ふ、夕方の五時頃、本郷の大學正門前を歩いてゐると、不意に名を呼びかけて、私の前に立つた男があつた。「どうです？」といつて、その男が私にお辭儀をした。私もお辭儀を返したが、それが誰であるか暫く思ひ出せなかつたので、少し曖昧な表情をしたと見えて、

「内藤です、分りませんか、變つたから。」と相手は言つた。その獨得の人懐こい聲と笑ひ顔と

で、忽ち内藤辰雄がぼーツと私の頭に浮んだが、それ程變つて見えたといふのは、彼はいつの間にか長髪を切り、口髭をそり、鬚髯をなくしてゐたからである。

「どうしてそんな恰好になつたんです？」

「労働者になつたからです、」と答へた。

「労働者に、」と叫んで、私は感心した。この労働者出の文學家こそ私たちと違つて、斯ういふ危急の秋には、忽ち筆を捨てゝいそぐと印絆纏に着更へられるだらう！

ところが、意外にも、彼が私に聞くには、

「あなたはどうします、大阪へでも行きますか？」

「え、僕、僕ですか？」と私はいつた。「僕は大阪なんかに行きませんよ。どうして君はそんなことを言ふんです？」

「僕は田舎へ引込まうと思ふんです、明日から、」と彼は答へた。「田舎といつても僕のでなく、堀江のです。」

その時初めて私は氣がついたのだが、これ迄通り彼の傍に彼の細君である堀江女史が立つて

ゐた。私は彼女と挨拶を交した。

六

「どうして東京にゐないのです。」

「食へません。あなたはいゝんですか？」

「僕など東京を離れたら尙更食ふ道の見當がつかません。」

「いや僕は……」と内藤辰雄がいふには、「僕は、この焼跡のがじくした氣分を見てゐるのが堪らないんです。この埃の、この騒々しい、落付きのない町の有様は、どうです？……僕は堪へられません。」

「變つてますね、」と私はいつた「それや餘りよくありませんけど、然しこれもいゝぢやないですか。まあ、無駄な、無力なやうなものです、無駄と知りつゝ、又こつ／＼と建直してゐるのは愉快ぢやアないですか。」

「本當ですか、」と彼は聞き返した、「本當にそんな風に考へるのですか？」

「君こそ本當ですか、」と私も聞き返した。それから三人で近くのカフェーに這入つて、珈琲を

飲んで一時間程話し、それから道順なので高等學校の横を逢初橋の方へ下りて彼等が空いた電車を待つ間、私たちは橋の欄干にもたれて、又三十分ほど話した。私はその間にも屢々彼に東京に踏止まることを勧誘した。と、傍から堀江女史がいふには、内藤は實に飽き性で、今度だつて、あの地震の後、早速髪を切り、髻を剃つて、印絆纏を着て出かけたのはいゝが、二日で止めてしまった、今また田舎へ引込むといふが、行つて見れば直に飽きるに定つてゐる。「だから一二週間したら直に東京へ参ることになるでせう」と彼女はいつた。

「君は二言目には頭ががじくするなどと、鈴木三重吉の小説の人物のやうなことをいふ。今の僕と君とでは、ブルジョアとプロレタリアの看板を塗りかへなければならぬ程、あべこべぢやないですか？」と私はいつた。

「さうですね。しかし僕の氣持はさうなんです。僕はあなたの氣持が却つて嘘のやうな氣がする位です。」

「僕も君の氣持を、嘘とは思はないが、不思議な氣がします。」

そして別れたのであるが、以來彼からの何の消息も受取らない。内藤辰雄よ、まだ田舎にゐ

るか。改めて『桃源にて』を勧める所以である。

餘震雜筆

二二六

十月號「文章俱樂部」に、「水火を経て来た人」といふ小文章を私は書いてゐる。

「アントン・チエホフの何とかいふ短篇小説の題の傍註に『水火を経て来た人の話』といふのがあつたのを私は覚えてゐる。その言葉が何とかいふことなしに私の記憶に止まつて、そして何とかいふことなしに私に屢々不意に思ひ出されることがあつた。それは實際何とかいふことなしであつて、私が町を歩いてゐる時、或は私が机に向つて居る時、不意に、一瞬間、私の頭を通り過ぎるのであるが、いつの時でも私はそれに不注意であつた、或は又いつの時でも私にその言葉の意味が解けないかのやうに見えた。

「が、今こそ私にこの言葉が不思議な強い力で、深い意味を持つて解釋されたやうな氣がするのである、即ち今年の九月一日の大災を経験して、私の愛する東京の人々が悉く『水火を経て

来た人』となつたと思はれるのである。あゝ、何と、水火を経て来た人々——とこれが書き出しである。

それから、私は私自身のあの地震の経験として、往來に逃げ出して、如何に日頃互に口もきき合はなかつた散髪屋の若者や、八百屋のお神や、病院の小使やと、一とかたまりになつて、肩と肩とを擦り合はせながら揺れる家屋や、電信棒を眺めたか、如何に眞暗な町を後から火に追はれる心地で、密集した人々の群集の中に交つて、時々兩側の家が今にも倒れるかと思はれる程揺れる中を、共に共に軍歌を合唱するやうに、お題目を唱へながら郊外の方へ逃げて行つたか、さて、如何にそんな大難に遭ひながら、不斷割合に安穩に暮してゐる時とは反對に、芭蕉流の無常觀とは反對の感じに緊張したか、やがて三日四日と過ぎて、地震も稍々をさまると共に、見渡す限り焼野原となつた町を或夜歩き、或晝歩きして見るうちに、一日毎に掘立小屋やバラツクが増え、倒れた電信棒が起され、惨死者の火葬の烟が消えると共に、假小屋の明りが増して行くのを見て、如何に人々の元氣に感激したか、といふことを書いた。「これは九月の『改造』に出た武者小路實篤の戯曲『桃源にて』の主人公が、自分が二十年も三十年も掛かつて植

また桃の株を、切られても、取上げられても、又こつくとその跡に植ゑて行くといふ心と同じ心である。これは、どんな心ない人をも、感激させる光景に違ひない。」といふところで、その文章が終つてゐる。

何故、私がこゝで自分の一度書いた文章をこんな風に繰返したかといふと、その後がもう一枚ばかりあつたが、印刷所の手落で失はれてしまつたので、それを補缺したいと思つたからである。

二

「就いては、冗談をいふやうであるが、私はこれ迄軍人が日清戦争の従軍記章とか、日露戦役の従軍記章とかいふものを胸につけてゐるのを不注意に、或は多分馬鹿馬鹿しいことのやうに見過して来たが、今、私はこれ等を最もいゝ意味に考へることが出来るのである、即ちあれ等は「水火を経て来た人」の章に外ならない。此度の東京の大災はその財産の損額からしても、人間の死傷の數からしても、日露の役の何倍ださうであるが、この大難を通過して来た東京の人々は、正にあの従軍記章を胸に輝かしていゝ筈である、何故といつて彼等はみな「水火を経て

来た人」たちだからである。」

これだけの文章が、後に附いてゐたのであるが、それが先にいつたやうな譯で落ちてしまつたのである。そのことで、或日、私は文章俱樂部主筆、加藤武雄君を訪問した折、用事の話が済んでから、いろ／＼と雑談を交した。折角斯うして筆を改めて書くのに、以前書いたものゝ補缺のやうなものだけでは、讀者諸君に甚だ申譯ない次第であるから、その時の雑談から一二思ひついたことを書いて見よう。

それは矢張り地震に關係した話であるが、新聞で見たのに、外國人が今度の大災に當つて、日本人が驚くほど落着いてゐる、實際彼等はあゝいふ場合人前もなく泣いたり喚いたりするらしいのであるが、日本人が持前の性質として、みんな割合に無口で、騒がないで、重荷を背負はされた動物のやうに行動してゐた、といふことをひどく感じてゐたらしいが、成る程、さういへば實際さうだね、と私たちは言ひ合つた。

人の一生は重荷を背負つて坂を行くやうなものだとは我々の祖先の教である。私たちはこの世に樂をしに来たのではなく、苦をしに来たのだ、と私など少年の頃聞かされたものである。

地震に遭ふことも亦この世の勤めの一つであらうか。——そんな風に多くの日本人は無意識に考へてゐると見える、そして襦衣一枚になつたり、老人を背負つたり、荷物を乳母車に乗せたりして、顔に苦痛と諦めの表情を漲らしながら、火事をのがれた公園の道や、山手の町やを黙黙として歩いてゐる人々を見ると、彼等は時々その沈黙を破つて、即ち西洋人なら泣いたり喚いたりするところを、何か彼か如何にも日本人らしい、謂はゞ俳味を帯びた「句」を吐くのを私は屢々聞いた。

「つまり辭世といふやうなものですな」と加藤武雄も同感していふのである。「死ぬ時に辭世などを吐くのは日本人獨特のものでせうからな。」

「さうですよ、」と私もいふのである。「だから、歌心のあるものもないものも、何か彼かあゝいふ際に、それ／＼の言葉で一句吐いてゐるのは愉快ですな。」

三

九日三日の朝——二日の晩は私の住居の方も火事の來る心配があつたので、私の家族と、それから、既に焼け出されて私の家へ避難して來てゐた二三の家族とを連れて、郊外へ逃げて行つた

が、その晩のうちに火事が止んだらしいので、取敢ず様子を見かた／＼、私は女たちを避難所の郊外に残しておいたまゝで、漸く焼けることを免れた我家へ歸つて來て、表から戸を外して、鍋と七輪とを外に持出して、玄米の飯をたいてゐた。

そこへ、地震以來初めて見る中戸丈助が襦衣と股引との上に、帯をぐる／＼巻いたゞけの慘憺とした恰好で、ひよつこりと横町から姿を現した。中戸丈助——私たちが生涯のうちに親子となつたり、友達となつたり、或は隣人となつたりして知り合ふいろ／＼の人を、それ等を書物にたとへると、中戸丈助は私が知る限りの人のうちで、最も愛讀するものゝ一つに屬する。彼は今年六十歳で、大和の産で、百姓の二男で、これまでにした商賣の數はダズンをもつてゝなければ數へられない、そしてその中の大部分は失敗した、中に成功したもので、これ迄に二度ばかり萬で數へる金を残したことがあつたが、その度に人に借り倒されたり、雇人に持逃げされたり、馬賊に襲はれたりして、もう少して命まで取られかけたこともあつた。さて、彼が東京に來たのは今から彼れ是れ十年近く前のことである。その間、私が見てゐたところに依ると、商賣道で、彼のやうに正直に、彼のやうに頑固な眞直さで働いて、而も彼のやうに成功する

ことが出来るとは！ 私の驚きであつた。彼は小切、裁屑切、見本切などを買い集めて、それぞれの向きに賣ることを商賣にしてゐたのだ、そして彼は、或時私が聞くと、もう六萬圓ほどこしらへた、といつてゐた。自分が儲けた金高を、彼のやうにより多くもなく、より少くもなく、彼のやうに時候の挨拶ほどに平氣でいへる人を、私は未だ見たことがない。

「よお！」と私は彼を見て叫んだ。「あなたの家は？」

「焼けたよ、」と丈助はいつた。

「お上さんたちは？」

「それが分らるので……」

「御飯は？」

「地震から未だ少しも、」と丈助は答へた。

丁度私のたいてゐた玄米飯が出来たところなので、「今直に熱れますから、一寸御待なさい、」と私はいつた。その時丈助は開いてゐた戸を通して、私の家の臺所の板の間に、地震前八百屋が置いて行つたまゝになつてゐる、茄子がごろ／＼してゐるのに目を止めると、獨り言のやうに

「これやもつたいない、こんな事しといたら……」といひながら、傍にあつた漬物桶の蓋と石を取つて、手早くそれを潰出した。そして彼がそれをしてゐる間に丁度飯が熱れたのである。

四

中戸丈助は私の家で遠慮することゝ有名な男になつてゐた。實際彼は不斷來ても、玄關を上つたことがなく、一杯の茶を出されることも辞退するといふやうな男だつた。その癖、私は私の放浪時代に、彼の家で二ヶ月近く居候をしてゐたことがあるのだつた。だから、あゝいふ場合で、而も二日二晩食つてゐないのにも拘らず、私が鹽をつけて握つた玄米飯をすゝめた時でも、「もらつていゝかな。外の人が食べるの大丈夫かね？」と彼は幾度も駄目を押してから、やつと握り飯に手を出した位である。

聞くと、地震前に彼は一萬五千圓程人に貸してあつたのと、二萬圓ばかりの品物が店と藏とにあつたのと、それをすつかりなくしたらしいのである。「だけど、仕様ない。もつとも銀行さへ開けてくれたら、まだ三萬圓位あるがなア……まあ、仕様ない。……あゝ、どうも御馳走さま。あんまりお腹が空いてると、かへつて食べられないもんだな。御馳走さま、——さよな

ら。」といった。何處へ行くんだと私が聞くと、これから兎に角會ふまで上さんを探し廻つて見るつもりだ、と彼は答へた。そして、若し又後で彼女が私たちの方へ尋ねて來たら、美術館の南側のところで待合はすやうにいつてくれ、といひ残して、彼は私が後から引止める言葉も聞かないで、さつさと行つてしました。

その午後、彼とも、又彼の細君とも、離れ離れに逃げたところの、彼の家の番頭をしてゐた、彼の甥がやつて來たので、私は二人で美術館の南側といふのへ行つて見た。が、そこに中戸丈助の姿は見られなくて、美術館の壁一面に「本所何町何某」「淺草何町何某家」等等、と我勝ちにと、人の目を引くやうに書かれた無数の姓名番地の中に、それ等の極く隅の、極く下の方に、小さな小さな字で「中戸丈助」と名前だけが書かれてあるのを見出した。おゝ、こゝでも遠慮してゐる中戸丈助！

が、彼の甥はその叔父とは違つた性格を持つてゐた。彼は最初私の顔を見ると、「畜生が！」と笑ひながらいふには、「地震に火事に、おまけに朝鮮人といふお添物まで來やがつて、畜生、畜生！」と矢張り笑ひながらつゞけた。「君はどうしたんだ、あの晩？」と私が聞くと、「本所の

枕橋の下で、五六時間の間水をつゞけ様にかぶつたよ、」とまるで海水浴でもしてゐたやうな調子でいふのだ。

「困つたな、丈助さんが見付からなくて、」と私がいふと、「なアに、歸つて來るよ、」と彼はいつた。で、私たちは一先づ私の家に引上げて、腹が空いてゐたので、二人で朝の残りの玄米の握飯を食つた。その時、思ひ出して、私は漬物桶の蓋を開けて、丈助が漬けて行つてくれた、丁度漬かり加減の茄子を出して來ることを忘れなかつた。

考へて見ると、丈助が、茄子を漬るのも、彼の甥が笑ひながら地震に向つて、「畜生、畜生！」と叫ぶのも、加藤君の所謂辭世の類であらうか。

人の印象その他

芥川龍之介の印象

私が初めて芥川龍之介といふ名前を知つたのは、その頃谷中の清水町にゐた江口渙の家であつた。私はその頃放浪してゐた。何故といつて、江口渙が清水町にゐたと覚えてゐながら、私自身が澁谷に間借りをしてゐた頃だつたか、家を持つてゐた時だつたか、それとも神田に下宿してゐた時分だつたか、それがよく思ひ出せない程だからである。それと共に、江口その人も、既に評論を書き始めてゐたか、未だ無名の文學青年だつたか、それも覚えてゐない。元より私は無名の、而も不遇な青年であつたが、少し大袈裟にいふと、胸に鬱勃たる文學的野望を燃してゐたものであつた。「どうだい、」と私は江口にいつた、「近頃何か新しい作家のもので小説らしい小説が見當つたかい？」さういふ私の言葉の裏には、「いづれを見ても田舎育ち（譬へが、）どれといつて頭抜けた者も出さうにないではないか、今に見る、俺が一つ書き出して、あつといはせて見せるから、」といふ程の意氣込みを出してゐた。流石の江口もその頃のさういふ私の

鼻息には多少辟易して見えた。

が、その時、彼はいつた。「芥川を読んだかい、芥川の『鼻』を？」夏目漱石が激賞したといふものだ。」

元來私はどんなに貧乏で、眞に三度の食事に困るやうな日を送つてゐた時でも、文學と、従つて文壇のことに氣を付けてゐない日はなかつたといつてよかつた。どんな作を書いて、どんな風に、谷崎潤一郎が文壇に出たか、又長田幹彦が認められたか、或は志賀直哉が、里見淳が、それどころか、彼等が認められる迄に既にどういふ作を發表してゐたか、その作がどんなものか、等、等、といふことを。ところが、この芥川龍之介の場合だけは、どういふ譯だつたか、それはもつとも私の單なる貧乏だけでなくて、その外に色んな點で最も艱難の激しかつた折だつたからであらう、つい私の注意がとどかなかつた。つまり私は芥川の『鼻』の事件を知らなかつたのである。

私はさうして『鼻』の載つてゐる同人雑誌『新思潮』を江口から借りて歸つた。當時私は多少穿つた酷評をすることで、一部の友達仲間を喜ばしてゐたので、(いふ迄もなく、賞めて評するよ

り貶して評する方が大抵の場合勝味があるものだから、)その時江口は私にその酷評で出し抜かれる豫防線として、「ちよつといひもんだよ、大したもんだとはいへないかも知れないが、確かに珍しい才のものだよ、」といふ程の、可成り遠慮した賞め言葉を添へて、それを貸してくれたものである。

然し、私も『鼻』を認めない譯には行かなかつた。が、頭からそれを認めてしまつては、相手は夏目漱石に認められた新進作家で、此方は無名の青年であるといふ位置からして、餘り權威のない譯だから、私はそれを江口に返す時、賞めると共に難癖をつけることを忘れなかつたのは勿論である。だが、今そんな批評めいたことは別として、その時私の傍にゐて、私より一層『鼻』に感心した者があつた。それは、私自身の變な樂屋落を語るやうであるが、當時私の同棲してゐた、私の作『苦の世界』に出て来るヒステリーの婦人であつた。元より彼女は決して優れた文學的鑑賞眼を持つてゐる女性などではなく、唯多少文學が好きといふ程度の者であつた。彼女はこの時以來、芥川の小説といふと、必ずその載つてゐる雑誌を手に入れて讀むことにし

た。當時、私は彼女のヒステリーの發作を恐れて、彼女の好むことといへば、大抵従ふことにしてゐた。だから、たかが一冊の雑誌にしても、それを買ふことがどんなにか苦しかったにも拘らず、芥川の小説が出るとそれを買はなければならなかつた。芥川は怨めしい男だ、と當時私は殆ど眞面目にさう思つた。延いては、それを勧めた江口渙も怨めしいと思つた。が、そんな事を白狀すると自分自身の恥なので、それは親友の江口渙にも到頭打明けずにしまつたことである。

江口渙といへば、私のそのヒステリー婦人は、現今はさういふ種類の女は殆どなくなつたらうが、文學士江口きよしと考へることに喜びと憧れを持つてゐた。つまり江口三吉とか、江口權兵衛といふやうな名であつてはいけない、それは新派の芝居に出て來る角帽を被つた優男を彼女に髣髴させるものらしかつた。だから、彼女は或日あの五尺七寸近い、偉丈夫型の江口を見て、「まあ、あの人が江口さん？」とあきれたやうにいつたことがある。さういふ點で、彼女は又誰から聞くともしなしに、文學士芥川龍之介といふ名に、少からず憧憬の氣持を抱いてゐるらしかつた。文學士で、小説家で、そして或時何かの雑誌の口繪を見たところでは、如何にも彼

女の想像通りの容貌をして、丈よりも高い本棚の前に腰かけてゐる、斯ういふくだらぬ事を書いて、芥川には甚だ氣の毒ではあるが、さういふ事も、彼女が彼の小説を最良させるに一層與かつて力あつたことは疑ひない。が、それで私が困らせられたとは神様の外に誰が知らう。

名前といふと思ひ出すのは、私の友達の畫家の鍋井克之のことである。彼は随分賢い男である癖に、時々變な御幣を眞面目にかつぐ傾向があつた、例へば三世相に出てゐる九星の話などそれである。さういふ點では、彼は科學より迷信に、信心といふより寧ろ趣味を持つてゐるやうに見えた。その鍋井が、雑誌の目次を見て、芥川龍之介といふ名前を見ると、よく彼一流の獨言とも話しかけるとも附かない調子で、「ほお、芥川龍之介、芥川龍之介！ うまい名前やな、えらい名前を付けよつたな、」と多分に大阪辯入りでいふのが常であつた。「どんな親かな、こんな名前を附けたのは。芥川龍之介、芥川龍之介、なる程、なる程！」

「何がなる程だい？」と私が承知しながら斯う聞くと、

「ふむ、ふむ、」と彼は唸るやうにいつて、暫く答へなかつた。が、やがて、彼は矢張り獨言の

調子で、「なる程、姓名判断といふものは當つてゐるな、姓名判断といふものは！」

「何が當つてゐるんだい？」

そして、結局彼のいふことを聞くと、多分姓名判断學からいつてもそれは根據のないことに違ひないので、一口にいふと姓名の「感じ」の問題らしかつた。つまり、彼にいはせると、芥川龍之介が、芥川辰之介でも、龍之助でもいけない、或は柳川龍之介でも感じが薄くなる、これは是非とも芥川龍之介とあつて一字も抜きさしならぬところである、例へば昔の名前に類を求めると、桃井若狹之介などが同じやうな感じであらうか、今の名前に類を求めると、市村羽左衛門といつたところであらうか。「ばつ」としてゐるよ、何處か斯う男前（大阪語）らしくて、派手で。——芥川龍之介、芥川龍之介、なる程、なる程？」と果は彼一流の獨言に終るのである。

餘談だが、その頃から彼は姓名判断を信じ出して、三四年前、彼に子が生れた時、彼は私に三つ四つ紙片に書いて名前を示して、この中でどれがいゝだらうと相談したことがある。こんなに幾つもの名前をどうしたんだと聞くと、姓名判断屋から聞いて來たとの答だつた。

さて、私が初めて芥川を見た（？）のは大正七年かの十二月末だつたかと思ふが、牛込の神樂坂が歳暮の景氣で雑沓してゐる午後七時頃、當時私は都館といふ下宿に住居してゐた、肴町で電車を下りて、下宿屋への道を人込が煩さいのと、半分位知つてゐる人に會ふのが面倒くさいのと、大急ぎで人と人との雑沓の間をくぐり抜けるやうにして歩いてゐた、南の方へ。私のその時の歩き方は少し位顔見知りの人と擦れ違つても、大抵知らずに通り過ぎる程の速力で、自然目の置きどころも、進んで行く前の一間四方位の範圍に過ぎなかつたと思ふ。それなのに、どういふ風にしてだつたか、ちらりと、一三間も離れた私と反對の町の側を、反對の方向に、一人の洋装の男が、これ又燕のやうな早さで通り過ぎるのに目を引かれた。それが私に芥川だと思へたのである。その時私は芥川を未だ知らなかつた。雑誌に出たものといつても、例の本棚の前に腰かけてゐる、不鮮明な寫眞版を一度見た切りでしか知らない、然し、そんな不鮮明な寫眞の記憶が、實物を見た時、寫眞の時と全然違つた装をしてゐるのに、非常にはつきりとその人間を認識させることがある。その時洋服を着た瘠せた芥川が、稍々前の方に傾き加減で、棒のやうな直線で歩いて行く恰好が、然し歳暮の町の萬の群集の中でだが、私には極めて印象的

に見えた、私はちらりと彼の方を見た。と、彼も、——彼は私でない、若しかすると私の近くに偶然美人でもが通つてゐて、その方を見たのかも知れないが、彼も亦ちらりと私の方を見たやうに思つた。當時私が彼を知つてゐても彼が私を知つてゐる筈がなかつたらうが、斯ういふと私自身を己惚れるやうだが、その私の方を見た彼の目は、どうも矢張り通りすがりの美人を見た目とは違ふやうに思はれる、鋭くて青く光つて見えた。

その時の印象では、彼も亦歳暮の群集の中を煩さく思つて、町の片隅をなるべく人を避けるやうに通つて行くらしく、その急ぎ足の傾いた棒のやうな恰好は、寫真で見た異國の文學者ンモンズか、エーツか、さういふ人の様子に似て見えて、私は甚だ感心したことを覚えてゐる。前記、鍋井克之なら「なる程、なる程」といつて立止まつて見送つたかも知れない。

もつともこの話は、その後芥川と知り合ひになつて、随分親しくなつてからも、どういふ譯だか一度も持出したことがない。「僕代そんな町を通つたことがないよ、」などと彼にいはれると、恥かしいと思ふからであらう。

私にとつて彼を忘れられない話がもう一つある。それは丁度私が小説を書き初めて間もなくのこと、それ迄は私の貧しい生活の足しに少年小説とか少女小説といふ風なものを月に一二篇書いてゐた。が、私がそれ等を書いてゐた時分には、未だ今日のやうに童話といふものが世に盛んに行はれてゐなかつた。世に行はれてゐないものなど、私のやうな無名の少年雑誌寄稿家には用がなかつたので、私はその頃まで所謂少年物は書いてゐたが、童話といふものは餘り書いたことがなかつた。それがその頃になつて急に童話の方が需要多くなつたので、私も遅れ走せに、町を歩いてゐる時でも童話的なものを構想したり、又は参考に讀む本でもそれに關係したものを選ぶやうにしてゐた。だが、今いつたやうに、もうぼつ／＼小説を書き始めてゐたので、その方は段々二の次に考へてゐた。ふと、その頃のこと、私は駿州の三保の宿屋で、今はもう題を忘れたが、何でも日本の各地の口碑とかを、五行位づゝの文章にして集めたものを讀んだ中に、鼻が高くなつて困つた男の話を読んだ。それが面白かつたので、それを元にして童話を作ることにした。多分、私はそれが一年前であつたなら、唯の童話として、唯の童話の雑誌に發表したに違ひない。が、丁度小説を書き出してゐた頃なので、これでいつか讀んだ「鼻」の

作者を當てこすつてやらう、幸ひ彼はその後文壇から消滅することなしに、それどころか益々人氣作家になつてゐるから、甚だやり甲斐があると思つた。私はその筋を二三の友達に話したら、それは面白い、殊更に芥川その人がやりさうな事だけに面白い、現に彼は Wensura Zoili といふ小説(これは勿論童話ではないが)を書いて、私の友人の廣津和郎をからかつてゐる、私のその童話「龍介の天上」ぐらゐ出してはかまはないだらう。

因みに、私はさういふ偶然の動機から思ひついて書いた「龍介の天上」について、同じやうな形式で、つまり何にも知らない子供が讀んでも、それはそれで通用する童話の形で、色々な作者や評論家を當てこすつてやらうと心の中で計畫した。その一端を洩らすと「不動武良王」といふ題で、これは當時新潮の不同調の欄で氣焰を吐いてゐた中村武羅夫を、不動明王のやうな荒神様に見立て、童話的な話に仕組んだものである、その他一二。然し、當時私自身も小説の書き初めで、而も不眞面目とか輕薄だとかいふ譏りを一部の批評家から受けてゐたことなので、この上痛くない腹を探られるのも馬鹿々々しいと思つたので、止めてしまつた次第である。

それは多分十月か十一月かの頃であつた。すると、その翌年の一月の末頃に、會ふ人會ふ人

が私に、この二月か三月かに、「宇野浩二撲滅號」といふ雑誌が出るさうだ、その音頭取、或は總指揮官は芥川龍之介ださうだ、と傳へるのである。そしてその雑誌は文章世界だとか、秀才文壇だとか、新潮だとか、傳へる人に依つてまち／＼だつた。だが、どういふ譯か、今度の地震の時の流言蜚語でさへ、多分に疑ひながら、一割か二割位は信じさうになつた私だが、その時の流言蜚語には、私は全然といつてもい／＼程信じなかつた。英のバイロン卿は一朝目醒めて大英國第一の詩人になつたことに驚いたさうだが、私は自分が小説を書き出してそんなに僅かしかたらないのに、そんな一つの雑誌全部で、それがたとへ撲滅せられる理由でも、論じられる程の身分になつたとは信じられなかつた。あの歳暮の神樂坂で見た瘡形の目の青く光つた、一口にいふと意氣な芥川が、そんな總指揮官になる圖も想像することが出来なかつた。今になつて見ると、却つてどうして私のやうな氣の弱いものがあの位頻々と傳へられた流言に迷はされなかつたか、不思議な位である。名前を擧げて悪いが、改造社長の山本實彦さへ、或日私の肩を叩いて、そのことを傳へながら、しつかりやりなさい、私の方へ是非書いて下さい、私は出来るだけあなたの後援をしますからなどと言つてくれたものである。「しつかりやるつて、何

とやりやうもないぢやありませんか、書くのは書きますよ。しかし、撲滅號なんて、それは斷然嘘ですよ。」私は實際自分がそんなに世に認められてゐるといふことに恐縮を感じながら、全くこの通りにいつた。そして、無論、この話は流言に過ぎなかつた。

さて、初めて正式に彼に會つたのは、その翌年の夏の頃、江口渙の本の出た祝賀會が萬世橋の「みかど」で催された時だつた。卓子の此方側に私とその右手に廣津和郎とが並んで腰かけた、芥川は向側の、私の前からすると向つて四五人右の方の椅子に坐つてゐた。みんな思ひ思ひに隣同志か、せいゝ一つ置いた隣同志位の距離で雑談をしてゐた。私は人見知りする性分で、知らない人には中々口をきけないものだから、隣席の廣津とばかり話をしてゐた。すると突然、向側の四五人も離れた席の方から、

「宇野君、僕が君を撲滅する主唱者になるつて噂があつたんだつてね、驚いたよ、」といふ意味のことを芥川がいつた。

「いや、しかし君なら相手にとつて不足がないよ、」と私は然し大勢の人中なので、少なからずとれながら答へた。が、その聲は芥川の方まで明らかに通らなかつたと見えた。すると、

「君なら相手にとつて不足はないといつてるよ、」と隣にゐた廣津が、彼の方が椅子一つだけ芥川に近かつたので、通辯してくれた。

それからどんな話をしたか覚えてゐない。その時、私は芥川を初めて見て、きちんとした人であるのに、口の中の目に立つ齒が一本抜けたまゝになつてゐるのが氣にかゝつた。その後の交際で、随分長い間この齒はいつもそのまゝになつてゐるのを私は見た。「君はかまはない男だな、」と屢々私は彼にいつたことがある。「どうして？」と彼は聞いた。「その齒を入れろよ。」「齒か……」

私の知人で、矢張りその齒に就いて話すものがあつて、彼はあんまり聰明で、その通り顔もあんまり拔目がなさうなので、あの口のところで多少人に油斷させるやうにしてゐるんぢやないかね、だから彼はあの齒もわざと入れないんだよ、といつたものがあつた。だが、私はそれに全く反對である。

私は芥川と交際してからも、一年のうちで指折るとせいゝ二度か三度しか會ふ折がない。

それに、彼と知るやうになつてから未だ三四年にしかならない。が、彼とは二人で旅行する機会もあつたし、訪問したことも、訪問されたことも、散歩したことも、飯を食つたことも、つまり友達として行動する範圍のことは大抵し盡して知つてゐる。世間では彼を聰明の頂點で、従つて人間として多分に冷い人であるやうに言ひ做してゐる。私はその前説には賛成だが、後の説には不賛成を稱へる。といふのは、彼は決して見えるやうに冷い人でない、そして私は彼の冷くないところに甚だ親みを感じて來たものである。彼のやうに聰明で、そして彼のやうに人情の溫味を持つてゐるなら、少し大袈裟に賞めていふと、人間としての最上のものとしていいだらう。彼がどんなに聰明か、彼がどんなに冷い人ではないか、そして彼の人間と彼の藝術とはどういふ位置にあるか、それは又別の機會に譲ることにして、こゝでは斯ういふ私が彼と友達にたる迄のいきさつを述べて見た。當の芥川よ、そして讀者諸君よ、諒されよ。

(十二、十)

人形芝居の披露

—

私の友人の永瀬義郎は人も知る通り畫家で、現に版畫協會の會員で、日本農民美術學校の職員をしてゐる。あの大地震の四五日前に、私は信州へ旅した序に、大屋町にある農民美術學校に彼を訪問したら、「暑いだらう、風呂にはひらないか」と彼がいつた。「さうだね、汗を流さうかな」と私がいふと、「あゝさうし給へ」と彼はいつて「村山君」と宿直室だつたかの方に向つて叫んだ。と、聲に應じて、私たちの前に、お釋迦様のやうに眞黒な髪を短く刈り込んだ、丈夫さうな、それで何處か沈鬱なところの見える青年が現れた。

「村山君を紹介しよう、村山槐多君の弟だ、この學校の彫刻の先生なんだ」と彼は私にかう紹介した。かと思ふと、「村山君、君、行くだらう、水浴びに」と彼は村山君に向つて、「僕も行くけど、先に案内してやつてくれないか」といつた。

私は少し様子が變に思はれて來たので、「君、風呂つて何處なんだ、遠いのかい？」と聞くと、「いや、二三町だよ、あそこだよ、千曲川だよ、」といった。

「川かい、」と私は驚いて叫んだ。そしてそれを中止した。——
間もなくあの大地震で、それは私が信州旅行から歸つて二三日目のことであつた。で、一日はあの騒ぎだつたし、二日の晩は私の家の邊まで火が來さうだつたので、私たちは田端の方へ一晩逃げて行つた位だつた。三日の朝、やつと東京中の火が消えたので、やゝ安心して、丁度晝頃だつたが、私が自分の家の前で椅子を持ち出して腰かけてゐると、突然町角から、洋服を着て、袋を背負つた永瀬義郎と、村山君との姿が現れた。「いつ來たんだ？」と私が聞くと、「今着いたんだ、」と彼は答へた。「汽車がのろのろしてるもんだからね、」といひながら彼の持前で、相變らずにここに笑つてゐた。

以前、私の家から二軒おいた隣に彼は住んでゐた。ところが、國の方から學校へ行く甥や姪やが、その家へ一人來、二人來して、遂には五六人になつて、あんまり騒々しくなつたものだから、彼はそれを彼等に明け渡して、一年程前から大森に家を借りて、細君と一緒に住んでゐ

たのである。だから、今彼が以前ゐた家には、彼の甥の名札が掛つてゐる。彼は二十分ばかり私と話した後で、その甥の家へまた十分ばかり寄つて、それから大森の細君が一人留守番してゐる家の方へ出かけて行つた。

それからすつと私は彼を二ヶ月以上見なかつた。——

彼はいつ會つても賑かな、面白い話手であつた。私の家へ來ても、私がゐない時とか、また私の坐つてゐる二階の私の部屋に上つて來る迄とかに、先づ私の母や妻やをつかまへて、一しきり賑かな話をするのが常であつた。私が家では物いはずで、減多に友達の話などしたことがないのに、私の家の者たちは永瀬を通じて、私の友達の馬鹿話や、失敗話や、而も一寸家の者たちにはいへないやうな事をでも、彼が彼一流の面白い話にして、彼等を笑はしながら傳へるので、よく知つてゐる。

二階でそれを聞いてゐた私が、やがて上つて來た彼に、「あんな話をするなよ、」といふと、「いかなかね、いかなかね、アハハハ、」といつては彼は笑つた。彼が笑ふと、私も笑はない譯に行かないやうに、彼は笑ふのである。——

さて、十一月になつてから、ひよつこり彼は私の家に顔を出して、「困つたよ、地震は矢張りい
 かんね。僕たちの仕事は當分駄目らしいよ。それに僕のワイフが肋膜炎を起してね、養生にやら
 なければいけないんださうだ。そこへ朝から晩まで欠伸ばかりしてゐる居候が一人ゐるんだ。
 地震の後に來たんだが、僕のワイフが厭がつてね。僕はかまはないんだが、どうだ、君んどこ
 へ引とつてくれないかね。矢張り地震はいかんね、アハハハ、」と彼はしかし相變らずにこく
 してゐた。

二

私の友人の高田保はイブセン會の會員で、新進の劇作家である。私が彼を初めて知つたのは
 不思議な場所であつた。それは今から十年程前、永瀬義郎が畫家である身分をも忘れて、私の
 別の友人である矢張り畫家の鍋井克之と共謀して、當時大流行であつた新劇團を組織したこと
 があつた、名前を美術劇場と呼んで、舞臺監督が楠山正雄であつた。その第二回の興行の時
 には澤田正二郎とか、田中介二とかいふ、やゝ本式の俳優が出たものであるが、第一回の時に
 は永瀬や鍋井が舞臺に出て、誠に素人らしい愛嬌を見せたものである。永瀬はストリンドベル

と作「火あそび」の中の老人の役を持つて、幾度舞臺に出て來ても白せりふを忘れた。困つて、「一寸新
 聞をとり來たんだよ、」とか、「今日は少し寒いやうだね、」とか、出鱈目の白をいつて、一旦引
 込んで、致はつてまた舞臺に出るのだが、出るとすつかり忘れてまた出鱈目の白をいつて引込
 むのである。舞臺にゐた外の役者たちは筋が運ばなくて、随分困つたらう、しかし、何にも知
 らない見物たちは、その永瀬の禿頭の老人が出て來ると、喝采して笑ふのである。そして彼が
 何かいふとまた笑ふのである。しかしそれは彼がそんな頓馬な事をしてゐると知つて笑ふので
 はなくて、彼がそんな風な愛嬌のある役をしてゐると見て笑ふのである。

それは餘談だが、その美術劇場の時代に、わが高田保は到頭舞臺に出なかつたかも知れない
 が、矢張り大いにやるつもりで、始終稽古に來てゐた。彼は永瀬と同郷で、三四年後輩に當る同
 窓の関係であつた。しかし、その時分の彼については、私は三四度、ちらと顔を合はしたゞけ
 位の間柄であるから、よく覚えてゐない。それからざつと十年経つのである。その間に、私は
 町で二三度彼に會つたことがあるし、彼が根岸の興行部の遊軍のやうな役を勤めてゐたので、
 二三度訪問して、金龍館の樂屋など見せてもらつたことがある。私が會ふ毎に、文學をやらう

と志しながら、つい芝居道に足を踏込み踏込みするのを、腑甲斐なく思つてゐるといふやうな、さういふ風な悲歎を洩らすのを私はよく聞いた。

さて、彼と最も親密になつたのは、今年の五六月頃から、私が勉強のために本郷の或下宿屋の部屋を借りたところが、そこに彼がゐて朝夕顔を見合すやうになつてからであつた。或日、私が彼の部屋を訪問した時、——彼の部屋は甚だ亂雑で、本棚に本がごちゃごちゃにおいてあるかと思ふと、思はぬ床の隅に綺麗な花を挿した瓶があつたり、友禪の座蒲團があるかと思ふと、貧弱な瀬戸火鉢の中に紙屑が丸め込んであつたり、かと思ふと立派な寫眞機が机の上においてあつたり、双眼鏡のサツクが本棚の本の間に轉がつてゐたりするのだ。——私が何氣なく、無論それだけの持物の主人であるのだから、時計があるとかないとかは考へる事さへしないで、「もう何時でせう？」と聞くと、「時間ですか？」といつて、彼は立上つた。そして例の亂雑の山の中から双眼鏡を探し出して、窓のところへ歩いて行つた。「何時ですか？」といふ私の問ひに返事もしないで、變な男だな、と私が思つてゐるひまもなく、彼は窓のところから首を出して目に双眼鏡をあて、はるか遠方を眺めてゐたが、やつとしてから、「何時何分です。」と答へた。

それは工科大学の時計臺を見たのである。

それから私は彼が好きになつた。その下宿には私の別の友人である三宅周太郎もゐた。高田は毎日晝頃目を醒ますと、彼の唯一の自慢であるコーヒー沸しで、コーヒーを沸かして、「コーヒーが沸きましたよ、」と私たちに一々知らして来てくれた。それが殆ど毎日である。しかし、或時私は彼が獨言のやうにかういつてゐるのを聞いた。

「おれもかうコーヒーばかり沸かして、も仕様がないな。……」

三

私は今またその本郷の下宿屋に歸つてゐるのであるが、考へて見ると、私も地震に怨みがある。それは地震と共に、その時まで毎日顔を合はし、また合すことを楽しみにしてゐた二人の友人を、その下宿屋から失つたことである。一人は大阪に行つた三宅周太郎で、今一人がこの高田保である。

高田保はあの地震と共に、そこを引揚げて、彼の勤先でもあり、親戚でもある根岸興行部の、赤坂の控家に行つてしまつた。十一月の或日——それは丁度永瀬義郎が大森の家を引拂つて、

毎日朝から晩まで欠伸をしてゐるといふ居候の始末をつけ、病人になつた細君を養生の爲に國の實家に送りとゞけて、身一つになつて、前記私の家から三軒隣の、以前の彼の住居であり、今彼の甥の表札の掛つてゐる家に身を寄せることになつて、「當分あの家の居候になつてゐるつもりだ、一人になると僕は決して食ふに困らないよ、氣樂だよ。君、さあ風呂に行かないか。」といつて、朝風呂に誘ひに來た日のことである。

「朝風呂はいゝね、行かう。」と私は應じた。「しかしいつかの千曲川には弱つたよ。」

そして、久しぶりで會つたことなので、私は彼と一緒に風呂にはひりながら、随分いろんな話をしたのだが、偶然高田保の話はその時は出なかつたのである。

ところが、その日の午後のことであつた、私はふと思ひついて、高田保！ 地震以來會はないが、どうしてゐるか、一度尋ねて見よう、と思つて、永瀬を誘つて見たところが、彼はもう何處かへ出かけたとのことだつた。

私は一人で先づ銀座の方の焼跡を歩いたりして、それから赤坂に廻つて高田保を訪問した。ど、私が通されて、彼と一言三言話したか話さなかつた時であつた、女中が來て、「あの、永瀬

さんがお見えになりました。」と傳へた、二人とも驚いた。私は高田と永瀬とが何か約束してあつたのかと思つた位であつた、そして高田も私と永瀬とに謀し合せでもあつたのだらうと察した位であつた。しかし、實際は全く偶然なのである。永瀬は私の顔を見ると、

「やあ、失敬。」とにこ／＼しながら、相變らず淡泊な挨拶をした。

「やあ、失敬」と私も同じ言葉で返した。

それから暫くの間三人で四方山の話をしてゐたが、ある話の切れ目の時、

「保ちゃん、今日は一つ相談があつて來たんだがね。」と突然永瀬が高田にいひかけた。「保ちゃん、今何か仕事があるかい、ない？　ちやあ、僕と一緒に人形芝居をやらぬかい？」

「やりませう！」と保ちゃんが、言下に餘り勢ひよく賛成したのは、傍にゐた私も吃驚した位であつた。「あやつりでせう、あの花屋敷にあつたやうな、あれやいゝよ、僕もやりたいと思つてたんだ、やりませう。ちよつとお待ちなさい。」彼はかういつたかと思ふと、いそ／＼と立ち上つて、次の間から紙と鉛筆とを持つて來て、「舞臺はどんな風にしますかね、人形はどの位の大きさがいゝかな、」などいひながら、その紙の上に縦横無盡に舞臺の圖や、人形の恰好

やをゑがき出した。

無論、永瀬義郎も負けてはゐなかつた。「僕は考へてるんだよ。藝術的なのも無論いゝが、桃太郎とか、兎と龜とかいふやうな、無邪氣なものもいゝよ。そんな時には木琴とか、口笛とか、柴笛とか、さういふ音楽がいゝね。保ちやん、口笛はうまいかい、どの位吹ける？一寸吹いて見ないか？」

「僕は口笛は子供の時から巧いんですよ、ちやあ、一緒に『もし〜龜よ』をやりませう」と高田保は叫んだ。そして忽ち二人の口笛の合奏が始まつた。

四

私が呆氣にとられてゐる間に、二人は口笛の『もし〜龜よ』を中途で止めて、

「だけど、義郎さん、衣裳や何かは僕は自信があるけど、肝腎の首や手足はどうするの？」と保ちやんが尋ねた。

「それや大丈夫だよ、信州に村山桂次がゐるよ、村山槐多君の弟の。農民美術學校の彫刻の先生だよ、」と義郎さんが答へた。

「もう話してあるの、その人に？」

「未だだよ。しかし大丈夫だよ、」と義郎さんは平然として答へた。

私がそれ等の有様を傍で見聞きしてゐて思つたことは、これは全く歐洲戦争の時、アメリカの兵隊が口笛を吹きながら咄罵したといふ趣きと似てゐる。これが成功しても愛嬌だし、失敗してもまた愛嬌であらう。――

それから二三日後の朝であつた。三軒隣にゐる永瀬義郎がまたひよつこり私を朝風呂に誘ひに來たので、「どうした、人形芝居は？」と私が笑ひながら聞くと、

「やつてゐるよ、だから、忙しかつたんだよ、」と永瀬は例によつてにこ〜しながらいふには、「この間あれから三日の間に、小田原の北原白秋も訪問したし、坪内逍遙も尋ねたし、鳥崎藤村にも會つて來たよ。そして、みんな賛助員になつてもらつて、それに脚本を書いてもらふ約束もして來た。」

「驚いたね、電光石火だね、」と私が感心しながらいふと、永瀬は熱い風呂につかつて、章魚のやうに眞赤になりながら、それ等の諸家を訪問した時の様を話して、一々聲色と仕方まじりで

やり出したので、外の客がくすくす笑ひ出した。

「君、わかつたよ、わかつたよ、」と私は彼を制して、「それで、人形の準備には矢張り信州へ出かけるのかい、いつ頃から？」と聞くと、

「もう大抵手はずは済んだから、明日あたり出かけるつもりだよ。今日はこれから人形の衣裳に使ふ、色んな小切を買ひ集めに行くんだ、」との答だつた。

が、その翌朝、私の方から彼を朝風呂に誘ひに行くと、彼の甥の答に、「昨夜、信州の方へ出かけましたよ、」といふことだつた。「え、高田さんも一緒にです。」

そしてまた二週間ほど経つた。ある朝、私が二階の自分の部家の床の中で目を醒ますと、階下の方で、母や、妻や、女中までが交つて、きやつくいつて笑ひこころげてゐる聲が聞えた。

「瞬間、どうしたんだらう？」と思つたが、直に私に氣がついたことは、それは永瀬義郎が来た時の外には、到底私の家などに起らない笑ひ聲に違ひなかつたので、「おや、もう歸つて来たのかな、」と思つた。すると、果して口笛で歌をうたつてゐるのも聞える、そして、その度毎に家の者たちがきやつくいつて笑つてゐる。「や、雀踊りを一をどり、」とか、「お爺さんもハク

シヨ、お婆さんもハクシヨ、子雀たちもハクシヨ！」とか、それはもう明らかに永瀬義郎の聲である。

下りて行つて見ると、果して彼であつた。彼は今しも何本かの糸でつた、友禪の着物に、縞の前掛をした雀の娘の人形を、私の家族を前にして、一生懸命に動かしてゐるのである。そして、足下を見ると、外に洋服を着たお爺さんの人形と、これもまた洋装をしたお婆さんの人形と、それから小さい少年と少女の雀の人形とが、立てたり、寝がしたりしておいてある。

「いつ歸つて来たんだ？」と私が聞くと、

「今歸つて来たんだ、」と彼は答へた。

「随分早く、しかも巧く出来たね、これは中々面白いね、」と私は感嘆して叫んだ。

「はッ、はッ、雀踊りを一をどり、」と永瀬は私の言葉には答へないで、一所懸命に雀の娘の人形を操りつゞけてゐるのである。

五

かりにも友達が一つの仕事をしようといふのに、それを紹介するのに、こんな披露の文章な

んてないかも知れない。さうかも知れない。しかしまた、かつて一つの仕事で、こんな風に気軽に、こんな風に簡単に始められたこともないだらう。前記永瀬と、高田と、村山と、幾ら致へ直しても矢張り永瀬と、高田と、村山と、この三人切りである。そしてこの三人が同時に人形の首や胴體こしらへ、その衣裳を工夫し、小道具を造り、背景を描き、さてそれを操り、その白をいひ、時としてはその音楽をも奏するといふのである。そして、若し彼等のいふ通りならば、今月の末か、來年の早々に、近頃の流行場である××ホテル演藝場に於いて、來る何日午後四時開場、一、白秋作「風ひき雀」。二、「桃太郎」全十場。三、實篤作「地藏と鬼」等、等と書いたピラが、東京中の文房具屋や、本屋の軒に下るのである。お、愉快なるドンキホオテたちよ、彼等に恵あれ!

何故わざ／＼信州の農民美術學校まで人形の製作に出かけて、一週間足らずで、僅にお爺さんと、お婆さんと、雀の娘と、雀の子供との人形だけをこしらへて歸つて來たのかと聞くと、「それは衣裳の點で困つたからだよ、」と永瀬の答だつた。「といふのは、考案は我々がするんだが、それを縫つたり織いだりするのには是非女の手が入るんだ。つまり首や胴をこしらへて行く

後から後からと、衣裳を着せて見ないと、どうも物足りない氣がするもんだから、それには朝から晩まで我々の仕事をするころへ、付き切りで助けに來てくれる女のある所を探しに歸つて來た譯なんだ。」

すると、その翌日、「簡單だらう、この三個の鞆の中に、材料から何からすつかり收まるんだからね、」と旅装をしてゐる永瀬が來ていつた。「これから僕のワイフの里へ出かけて行かうと思ふんだ。そこならワイフは病氣だが、外に女手はあるし、それに一寸した工場をワイフの家で持つてゐるから、その隅を製作場に借りられる便宜があるんだ。」そして袖時計を出して、「ああ、もう高田と村山とが停車場で待つてゐる時間だ。ちやあ、失敬!」

が、それから三日程して、彼等の一行はまたもや三個の鞆を持つて歸つて來た。永瀬がいふには、

「どうもワイフの奴、病氣だもんだから、變に氣むづかしくてね、仕事の妨げをしていけないんだ。人形か? やつと新しいのを五個だけこしらへて來た。しかし、今度は一寸仕事場のあてがないので困つたよ。」

「君ならまた直に何とかするだらう。」

「それやするよ、」と彼は相變らずにこゝしながらいつた。そしてふと思ひついたやうに、「さうさう、君、相馬の前夫人のとり子女史ね、あの人はこの頃は丸の方をよしてるといふから、遊んでゐるだらう。彼女ならこんな事に興味を持つよ。さうだ、あそこへ行つて、衣裳の手傳ひをしてもらつて、次手に庭の隅を製作場に貸してもらはうか知ら。」

「亂暴だね、」と私はいつた。「そんな事を獨りで定めて……。永瀬流だね。」

ところが、それからまた二日程消息がなかつたかと思ふと、一昨日來た彼からの手紙がいふには、「とり子女史のところへ、愈々一座を引きつれ、今日から住み込むことになつた。君も小説を書くのが暇になつたら、一度來ないか。うん子、木の皮、かぼちゃんといふ三個の生き物がゐるよ。うん子と木の皮は猫の名で、かぼちゃんは人の名だ、それ／＼大いに活躍してゐる。けだし君が來て損にならぬ。電車は市内電車何處そこで下りて……(云々)」

うん子、木の皮、かぼちゃん、義郎さん、保ちゃん、桂ちゃん、——すべてこれ等は悉く人形芝居の人物ではあらぬか。これはもとより輕蔑した意味ではない。かういふ人たちがやる人

形芝居である、面白くない筈はないと思つて、こゝに披露する所以である。

(十二、十二)



◀ 步 散 的 學 文 ▶

大正十三年六月三日印刷
大正十三年六月一日發行

(定價壹圓貳拾錢)

著 作 者

宇 野 浩 二

發 行 者

佐 藤 義 亮

東京市牛込區矢來町三番地

發 行 所

新 潮 社

電話牛込

八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番

番二四七一(京東)番邊

印 刷 所

東京市小石川區西江戸川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

—「文學的散步」—

感想小品叢書

文壇諸家の主張と其生活ぶりを窺はしむ可き隨筆集。感想あり小品あり批評あり旅行記あり人物論あり。興味豊かなる絶好讀みものとして歡迎せらる。

- | | |
|-----------|----------|
| (1) 我が文藝陣 | 菊池 寛氏著 |
| (2) 泉のほとり | 正宗白鳥氏著 |
| (3) 微笑笑藝術 | 久米正雄氏著 |
| (4) 七寶の柱 | 泉 鏡 花氏著 |
| (5) 草 | 武者小路實篤氏著 |
| (6) 白醉亭漫記 | 里 見 弴氏著 |
| (7) 文學的散步 | 宇野浩二氏著 |

一冊壹圓廿錢◇送料八錢

久米正雄氏著

長編小説 破船

全二卷の雄篇 前編壹圓五拾錢 後編壹圓貳拾錢 郵送料八錢

文豪勝見漢石の娘多子と、若い作家小野と、小野の友人なる杉浦との戀の三角關係を主として、小野の失戀の苦悶を描いたもの。一と云つたならば、人々は、直にそれが作者の痛切な體驗に成つた自叙傳小説である事を首肯するであらう。華やかな戀愛小説で、而も深刻な心理小説である此の篇は、單なる自叙傳的興味を離れても、一箇のすぐれたる作品として、恐らく、作者が一世一代の大作たる可きものであらう。

長編小説

戀愛合戰

宇野浩二氏著

これは現代戀愛生活の鳥瞰圖である。現代に於ける青年男女の性的生活の、極めて赤裸々な、而して、最も精細な報告書である。妖艶な風姿と冷凄な心情とをもつた一女優を中心として、文壇と劇壇とのいろ／＼の男が、その女の愛を獲ようとして争ひ合ひ聞き合ふ光景を赤裸々に描いたものである。本書一たび出づるや、各新聞は、巻中のモデルが悉く文壇と劇壇の知名の士であることを素ッ破抜いたので、讀書界の噂さは、俄かに高まり、モデル問題甚々、作者を困しめてゐる。(價貳圓五拾錢、送料拾貳錢)

中篇小説叢書

紙數百六拾頁
送料一冊七拾錢

中篇とは、長篇よりも短く、短篇よりは纏まつた二百枚前後の作品、海外に於てノゲ
エレットと稱するものに名づけたので、收むる所の左記の各篇、何れも現代文壇中
堅作家の名作揃ひである。短篇を雜然輯めた叢書類の比でないこと云ふ迄もない。

(1)	潮	風里見淳	(9)	破婚まで	宮地嘉六
(2)	剪られた花	佐藤春夫	(10)	野ざらし	豊島與志雄
(3)	世の中へ	加能作次郎	(11)	存生	細田源吉
(4)	明暗の街	谷崎精二	(12)	アヰマリア	谷崎潤一郎
(5)	走馬燈	室生犀星	(13)	闇を歩く	水守龜之助
(6)	二人の彼	武者小路實篤	(14)	舊先生	藤森成吉
(7)	露	久保田万太郎	(15)	戀と牢獄	江口 洸
(8)	山戀	宇野浩二	(16)	都會へ	加藤武雄

新潮社版

515
118

終